

「人類社会の進化史的基盤研究(4)」 第2回研究会

日時：11月14日（土）13:00-19:45、および11月15日（日）9:00-12:30

場所：AA研棟マルチメディアセミナー室（306）

報告者：

1. 内堀基光（AA研共同研究員・放送大学）
2. 足立薫（AA研共同研究員・京都産業大学）
3. 藤井真一（ゲストスピーカー・大阪大学大学院）

内容(要旨)

1. 生きる共同体の過去と未来（内堀基光）

人間の社会性（人と人との関係のしかた）というときの「人間らしさ」は、過去との結びつき（被規定性、制度の惰性性、記憶）と未来への視点（配慮、不安、希望、存続、そして極限的なものとしての恐怖）にある。すべてこれが出発点である。現在は過去と未来のバランスの軸心だが、過去の重みと未来の重みは、人間の集合としての共同体によって大きく異なる。ここで共同体はごく小さい家族的単位から、最大限では全人類にまでおよぶものとする。個体としての人間は、二者を超える複数するとき、記憶と期待を直接には共有しない。これを共有するものを共同体と考えるが、共有の程度はさまざまであり、それが共同体というかたちで現れた人間の社会性の具体的性質と限界を決める。全人類の集合の中で、さまざまな共同体が空間的に併存し、また重層的に積み重なっている。

上の段落の後半は人間の社会性≈共同性について当たり前のことであって、人間にかかわるかぎり、その集団論、制度論、他者論のすべての前提になっていたことである。その延長に位置する「生存・極限」研究では、制度研論文・他者研論文で書ききれなかったこと、つまり前段落前半分を論じることにする。とりあえず、制度研・他者研論文の到着点からはじめることにしたいと考えている。それは人間に特有の二重世界の成立に関わることであり、およそ次のような言い方になる。

「死者がかつて生きていた、おそらくは多くの場合空間的、心理的に近いところにいる（親しかったか憎んでいたか）他個体との個体間関係に基礎を置くのに対し、はるかに無限定で、共同体の了解、承認によってのみ同定が可能となるような幻影としての他者（精霊や神）の場合、前者（死者）の存在には必

要でない世界の認識が必要になる。おそらくは「もう一つの世界」としての空間、世界の二重性。死者の存在と他界の存在を単純には同一の初発事象として結びつけられなかったのだが、幻影としての他者の空間が用意されているかぎり、死者の居場所もまた用意されたというべきであろう。本質的にエフェメラルでもありうる死者に対して、精霊は、確固とした共同了解の意味世界に、幻影でありながら幻影を超えたものとして置かれている。その世界は尋常の人間にとってはある種外部世界であり、精霊はそこからより身近な覚醒時の生活世界に去来してくる。このもう一つの世界の成立によって、死者も精霊と同じ資格で独立した存在者になりうるのである。」

(人類の) 歴史は、個体の死があるから、生成すると言ったのはヘーゲルだが、20 世紀後半は広い意味で、さまざまな意味での「反歴史」の時代だったように思われる。21 世紀はふたたび（良くも悪くも）歴史の時代になるのかもしれない。歴史はとりあえず過去に起きたこととして語られるが、過去の語りには未来の不安、恐怖の投影があり、歴史はいわばそれを視ようとする共同性をめざした営為となる。今ここにあるものと、今ここにはないもの、今ここにあって、いつかなくなる（かもしれない）ものについての、不安、恐怖をともなう想いは、アニミズムとは相対立するものでもあろう。そこにはアニミズムの二重世界とは異なる、未来と予測、また恐怖と救済というモメントが働くことになる。「神」のイメージを導入しても良い。アニミズムは永遠の現在を拠り所とするが、単独者としての個体の「神」の永遠性は、虚偽の永続、虚偽の過去と未来、つまりフィクションとしての永遠の謂である。「神」は、永遠としての、掴みえない未来における恐怖と救済のバランスのなかに出現する。あるいはまたアニミズムでもありえた「死者と過去」から、恐怖を内在した「神と未来」への転換をそこに見ることもできる。

ここから共同体の 2 つの対照的な存続根拠についての議論を展開することがこの研究プロジェクトにおける私の課題となる。予告としては、共同体の過去と現在から未来への永続（持続）への根拠を語る議論として、内山節『共同体の基礎理論』（2010）、Peter Metcalf のロングハウス・コミュニティ史（Life History of Longhouse, 2009）を読み解くことから始めるつもりである。あわせて、岩田慶治によるアニミズム論の再評価も課題として設定する。

2. 社会の進化と種間関係（足立薫）

動物の社会行動を扱う生物学の分野にあって、異種間の関係は中心的な課題となることは非常に稀であった。その理由の一つは、進化生物学が同種個体群の中の個体変異に注目するために、種間関係は二次的なテーマとならざるを得ないという点にある。とくに近年の進化生物学では、個体変異や進化過程の遺伝的基盤への関心が強化され、社会行動の進化は主流の課題と言えなくなりつつある。加えて、「種とは何か」を定義するのが困難であるという、古典的な問題の存在が、種間の社会関係をとらえることを一層難しくしている。ローレンツやティンバーゲンが動物の社会行動を研究し始めたエソロジーの黎明期においては、種特異的な定型的行動が、動物のコミュニケーション研究の主要な対象であった。そのため、種は均一な性質をもった対象と捉えられ、種間の特徴を比較して進化が議論された。それに対して社会行動の研究に行動生態学の概念がもたらされて以降は、進化適応の単位が種ではなく個体、あるいは遺伝子に変更されたことによって、同種個体間の行動の変異を明らかにすることが、社会進化研究の重要な課題となり、種間の違いへの関心は薄れていくことになった。

社会進化の行動学的な研究では、種という単位が主題化されなくなる一方で、生態系の群集構造を対象とする進化生態学では、種間関係は一貫して重要な分野を構成してきた。進化生態学では種間関係を、共進化の文脈で考察する。被食―捕食や寄生―宿主関係は、その代表例であり、また種間での利益の偏りが極端なものでもある。同所的に共存する異種個体群の関係は、生物多様性や生態系のバランス、安定性の側面から、環境に関わる重要な現代的課題として取り扱われている。

霊長類学においては、社会集団における個体の社会行動を対象とする分野では、種間関係は主要な研究対象とはなっていかなかった。その例外が、混群研究である。混群は異種の群れが同所的に生息するだけでなく、ともに採食や遊動を行い、同種の群れのように生活する現象である。熱帯地域の中型小型の霊長類にみられる現象で、ほかに鳥類や魚類でも観察されている。霊長類の混群研究は、群集生態学における競争と共存の理論を基礎として発展してきた。近縁な異種の群れの個体どうしが、潜在的な競合をどのように回避しているのか、あるいは競合のコストを上回る利益をどのように得ているのかについて、個体の行動から混群形成の要因を探る試みが行われてきた。ここでは混群を形成す

るという社会行動における種間関係は、競合にかかわるコストとベネフィットの収支という生態学的仮説に置き換えられている。

一方で、混群は、異種の群れが同所的に共存しながらゆるやかに群れとしてのまとまりを保ち続ける現象である。混群形成の現象では、同種群のようなグルーミングや順位を争う闘争行動のような、目立った社会交渉は見られないが、「そこはかたない関心」を保ちながら異種の個体どうしがひとつの群れにとどまり続ける。ゆるやかに結びつきながら、出会ったり離れたりを繰り返す混群では、どのようなメカニズムで集団が形成されているのか、同種群と同様のアプローチでその社会性に迫ることは難しい。目立った社会交渉ではなく、従来は社会行動とは考えられなかった遊動や採食行動の詳細なレベルでの同調や共同の様子を、時空間に再現するような新たな分析手法が必要とされている。このような混群独自の社会のありように注目し、異種間の社会関係の進化を構想することの利点は何だろうか。

種間関係に注目をして混群社会を見る場合、「種」の違いに注目することによって、個体間の差異が相対的に捨象され、遺伝的変異に視野を限定せずに行動を見ることができよう。さらに「群集」のレベルに視線をおくことによって、群れ全体や個体群全体という大きなレベルで社会をとらえ、個体の意図や意識を前提にせずに行動を社会性の文脈におくことが可能になる。なぜ群れを作るのか、という問いから動物の社会行動に迫ろうとするならば、本当に明らかにしたいのは「群居性の構え」とか「同調への志向性」といった基本的な特性である。これらの基本特性は説明されるべき社会性に対する前提条件ではなく、まさに社会性そのものであると理解でき、そのような理解によってはじめて人間も含めた動物の社会性の進化へのアプローチが有意味なものになると考えられる。

混群における種間関係から社会行動を見ることで、「構え」や「同調」を前提としない社会性を構想できるとしたが、事態は同種個体間関係でも同様である。実体的な「関係」に基づく因果関係ではなく、どんな枠組みも先行しないもっとも基本的なところで、集団が成り立つ様子をとらえることが重要となる。一つの方法としてルーマンの二重の偶有性による社会システムの創発を参照し、「相手が自分が予想することとは違う行為を行うかもしれない」というダブル・コンティンジェンシーから社会性の成り立ちを明らかにすることが考えられる。「解決」をゴールに志向するのではなく、「失敗」をニュートラル

に組み込んだ社会システムとして社会をとらえることができれば、混群のような特異な社会集団も含めて、多元的な社会のありようを統一的に進化の枠組みで扱うことが可能になるだろう。

3. 暴力と平和力ーソロモン諸島の「民族紛争」渦中における生存戦略（藤井真一）

本報告の着想は二つある。ひとつは西田正規 [2003; 2004] による武力と平和力の共進化に関する議論である。彼は、直立二足歩行に伴う手の自由使用から、武器へと転じうる道具の携帯へと進化する中で、人類は強力な武力を手に入れたという議論を展開した。さらに、強力な武力を社会内部へ向けることは社会や種の存続を危機に晒すとの推論から、「より強い武力が進化するには、その武力が種内にむかって暴発することを避けるための、より強力な平和力の進化がともなっていないとてはならない」[西田 2004: 276] と論じた。

もうひとつは、メラネシア人類学の主要な研究主題である戦争論と交換論である。ニューギニアの部族間抗争やソロモン諸島の首狩りに関する事例報告は膨大にある。わずかだが、暴力的な事態を收拾するための方策に関する報告もある [Wedgwood 1930; Epstein (ed.) 1974 など]。特に、報復殺人 (blood feud) を終結させるための儀礼において贈与されるモノが、紛争解決のみならず婚資としても機能して、敵対関係を婚姻同盟へと転換させるとの議論は注目に値する [Harrison 1993; Knauft 1999 など]。

本報告では、西田による武力と平和力の共進化に関する議論と、メラネシア人類学における戦争と交換に関する議論に着想を得て、報告者が調査しているソロモン諸島の「民族紛争」を題材に、暴力と平和力の相互的關係について考えることを目指した。

1998 年末から 2003 年にかけてソロモン諸島で生じた「民族紛争」はガダルカナル島民とマライタ島出身者の対立だとされてきた。しかし、「民族」を対立軸に、社会・経済・政治的背景を無視した紛争理解では不十分との指摘が繰り返されており、紛争の背景には植民地主義の遺産、経済や土地をめぐる諸問題などの複合的要因があったといわれる。死者数は約 200 名、国内避難者数は 35,000 名と推計されており、従来の研究では避難者数の約 4 割を占めるマライタ島出身者に対する注目が多かった。一方、同じく約 4 割近いガダルカナル島内の避難民についての報告は数少ない。本報告では、紛争渦中に避難生活を強いられ

たガダルカナル島民、特に激戦地であったガダルカナル島北東部の人びとの生存戦略に焦点を当てて取り上げた。

ガダルカナル島北東部の人びとは約 6 割が住居を失い、ブッシュへ逃げるしかなかったといわれる。当該地域には大規模なアブラヤシ農園が位置し、特にマライタ島からの労働者とその親族が多く居住していた。「民族紛争」勃発を受けて彼らのほとんどが住居や財産を捨てて首都への避難やマライタ島への帰還を余儀なくされた。また、ガダルカナル島出身者たちも、紛争に巻き込まれることを回避すべく、自身の畑に仮住まいを建てつつ複数地点に点在する畑を転々として生き延びた。

武装集団へ積極的に加担した情報提供者によれば、畑仕事などのため出払っているマライタ系住民の家屋に対して、農薬等散布用のポンプで石油を撒いて放火して回ることで「居場所」を失わせたという。その他、ガダルカナル島北東部の人びとによる紛争への消極的な関与として、海へ潜って太平洋戦争時の弾薬を収集したり、海岸部でマライタ側武装集団が襲撃してこないかどうか警備したりしていたことが挙げられる。

一方、紛争への加担や関与を回避する消極的対応として、次のような事例があった。(1) 加入を要請する武装集団に対して食糧等を提供することにより戦闘員の提供を回避すること。(2) ガダルカナル島北東部の人間と通婚して当該地域に居住していた一部のマライタ系住民を暴力から守るため、「ペル・ウル」と呼ばれる贈与財の授受を伴った儀礼を行なわせることで紛争から距離をとらせたこと。(3) 近隣にあるゲラ島との混血であることを強みに、封鎖された陸路ではなく海路で生活物資を調達してきてガダルカナル島北東部の集落で分配したことなどである。

これら紛争を回避する消極的対応はいずれも、贈与が暴力の発現を未然に防ぐ平和力を発揮する事例と考えることができる。ただし、それらはポトラッチのような競争的な性格ではなく、受贈者に負債を与えるようなものでもない、モノを贈ることで非物質的な社会関係を享受する「異次元交換」であった。そのような平和力を発揮する贈与を可能としたのは、豊かな食糧をもたらすガダルカナル島北東部の生態環境でもあった。

こうした贈与、交換、分配を通じた敵対的なかわりの回避は類人猿にも認められ、進化史的基盤を考える上で恰好の素材を提供するはずである。ただし、交換（贈与）されたモノにそれまでの社会関係の来歴が織り込まれる人類の交

換は、食物を独占したいという我欲を克服して分配する類人猿の行為と区別できそうである。ここにヒトとサルの進化の連続性と非連続性、暴力と平和力の共進化の筋道を見出せるかもしれない。

【参考文献】

西田 正規

2003 「社会進化と平和力」西田正規ほか編『人間性の起源と進化』63-95 頁、昭和堂。

2004 「家族社会の進化と平和力—家族・分配・平等性」寺嶋秀明編『平等と不平等をめぐる人類学的研究』274-290 頁、ナカニシヤ出版。

Epstein, A. L. (ed.)

1974 *Contention and Dispute: Aspects of Law and Social Control in Melanesia*. Canberra: Australian National University Press.

Harrison, Simon

1993 *The Mask of War: Violence, Ritual and the Self in Melanesia*. Manchester & New York: Manchester University Press.

Knauff, Bruce M.

1999 *From Primitive to Postcolonial in Melanesia and Anthropology*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Wedgwood, Camilla H.

1930 Some Aspects of Warfare in Melanesia. *Oceania* 1(1): 5-33.

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.